†CARD DIVIZER†　～RECREATED～

黒衣を纏う執行者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
†ＣＡＲＤ　ＤＩＶＩＺＥＲ†　～ＲＥＣＲＥＡＴＥＤ～

【Ｎコード】
Ｎ２０４４Ｑ

【作者名】
黒衣を纏う執行者

【あらすじ】
これは僕のオリジナル作品『Ｃａｒｄ　ｄｉｖｉｚｅｒ　～苦しみと哀しみを超えて～』のシナリオ・ストーリー・表現等を大きく見直して『再構築』した作品です。

†0† Prologue

１９９４年、世界的にも有名なとある占い師が、ある不吉な予言を残して亡くなった。

『コスモスの華が陽光の周を十七度廻りし時、
この世に死が舞い降りるであろう』

つまり『今から17年後に、世界は滅ぶだろう』と。

一方その予言に対して、こんな予言を下した占い師もいた。

『，苦，と，デビルズ・ダース，の含まれし日に、死に望まれぬ子が産み落とされるだろう。
そしてその者は，闇より暗き深淵，を纏いて、死の闇を斬り裂かん』

様は『今年の９月１３日に、世界を滅ぼす要因を阻む子供が生まれる』と言うことだった。

大多数の人々はこの予言に耳すら傾けなかったが、とある企業はこの予言の後者に読まれた

『望まれぬ子』を捕らえるべく、奔走した。

そして１９９４年の９月１３日。……

母親に望まれずに産まれ出た胎児が、ある協会によって、保護された。

◆

そして時は経ち、西暦は２００９年。

『ＤｒｅａｍｅｒＳ』と呼ばれる企業が『ディバイザーシステム』を考案・確立し、

世の中にそれが浸透したのがつい去年の事。

ありとあらゆる『物』を収納・格納する事が出来るこの画期的な技術、それが

ディバイザーシステム。

薄いカード型の記録媒体にあらゆる情報・物を取り込む事の出来る、

云わばカード型の『鞄』だ。

そう、これがあれば何でも好きな物を瞬時に収納することが出来る。

そう、例えそれが、

人にとって害のある物だったとしても、だ。

「はぁ・・・はぁ・・・っ」

ある都会のビルの裏通り。

そこで素行の悪い男性が一人、息を切らしながら走っていた。

いや、『何かから逃げてきた』と言うのが適当だろう。

恐怖が顔にありありと浮かんでいた。

「はぁっ・・・はぁっ・・・・・・ふぅ」

後ろから何も追って来ない事を確認すると、男はその場に座り込む。

頭の中で、自分を襲ってきた異形の姿の者の事を反芻しながら、乱れた息を整える。

だが、男は知らない。
危機はまだ、去っていない事を。
そして、

「グゥア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛！！！！」

「っヒィっ！！？」

その危機そのものが、自らの頭上で待ち構えていたことに。
完全に不意を突かれてパニックに陥った男に、異形の怪物が迫る。
男が腰を抜かし、そして、

「ガァヴゥアアアアアアア！！！！」

その瞬間、男の体は怪物のその鋭利な爪に拠って、真っ二つに切り刻まれた。

「・・・・・・んで、俺に仕事？」

同刻、古い趣の漂うオフィスの一角。

事務机でタバコを吸う男性に向かって、一人の少年が尋ねた。

・・・・・・漂ってくるタバコの煙に口を閉口しながら。

「ああ・・・『仕事』って言うよりは『教育』に近いか？」

「俺に聞くなよ・・・・・・で、何だよ教育って」

顔つきの整った凛々しい少年が、今一度聞くとでも言いたげに声を発する。

「お前ももう１５だろ？　だがお前はマトモな教育をマルっきり一

切受けてない、
だからお前を3年間高校に通わせようと思ってる」

「何で今更・・・大体、勉強なら『爺さん』から教わってるからいいっての」

「ところがドッコイ、これはその『壮吉爺さん』からの願いなんだよ」

「・・・・!!」

男の出した『壮吉爺さん』の言葉を聴き、少年は驚いたように目を見開く。

その様子を見ながら、男は話の続きを話し出す。

「勿論『こっち』の仕事も込みなんだが・・・壮吉爺さんたっての願いだ、
・・・・・・無碍には出来ないだろ？」

「・・・・・・分かった、爺ちゃんがそう言うなら受けてやるか、
その『教育』ってのを。

で・・・場所は何処だ？」

「それはだなっと・・・・・・おぉ、あったあった」

書類やカップ麺の容器が山積みになっている机の中から、
一枚の紙を引っ張り出し、少年に渡す。

「・・・ここって・・・爺さんの担当区域の・・・」

「そう、『妖魔』の出没率が最も高く、あの『ＤｒｅａｍｅｒＳ』の本社がある都市『桜町』だ。
壮吉爺さんがいるから『仕事』の方は問題無いだろう、だからお前は学生生活を楽しんでくれ」

「まぁ・・・分かった」

少々納得がいかないような素振りを見せる少年だったが。

（『学校』か・・・・・・どんなトコなんだろうな・・・）

内心は、新しい生活への期待で溢れていた。

「学校・・・・・・・・・か」

無機質的且つ殺風景な自室のベッドに腰掛け、これからの新しい生活に思いを馳せる。

今までは戦って、戦って、戦って――――――戦い疲れてベッドで眠るまで、妖魔を狩っていた。

爺ちゃんや他の皆から、体捌きや何やらを学んで、色んな妖魔と戦って。

・・・・・・戦って・・・・・・・ばっかりだな、俺。

でも、これからは少し違う。

学校に行って、今まで爺ちゃん達からは学べなかったような事を学んで。

テレビドラマで見たような、普通の生活をする。

血ではなく、笑顔と平穏に溢れた新しい生活。

そんな生活が、俺を待っている。

「・・・ふぅ・・・・・・・」

腰掛けたベッドに横になり、睡魔に襲われボーっとした頭で思い描く。

これからの事を。

この先の事を、そして。

俺を捨てた、両親の事を。

To be continued

Ｐｒｏｆｉｌｅ？　『田上執斗』

田上執斗　～たがみ　しゅうと～

性別：男

年齢：１５歳（９月１３日で１６歳）

身長：１７２ｃｍ

本作品の主人公。
妖魔殲滅機関『暁の会』に所属する。
上司及び親しい『壮吉爺さん』の意向により、高校生活を送ることとなる。
今まで一般常識とは程遠い生活を送っていた為『壮吉爺さん』に一般常識を叩き込まれ、
晴れて『夜桜学園』に編入することに。
勉強は『暁の会』の年上の仲間が教えていたため優秀、特に英語が得意だが数学は苦手。

産まれたばかりに親に捨てられた孤児である。
十数年前の予言にあった『死に望まれぬ子』であり、世界の命運の鍵を握っている。
予言にあった『子』だと言うことは知らされており、その宿命も真摯に受け止めている。

『暁の会』に登録してから日は浅いが能力は高く、周囲からは『新参者（ニューカマー）』と呼ばれ、
期待を寄せられている。

性格は真面目で冷静沈着、クールな風貌の所為で冷たいイメージを持たれがちだが、
施設の子供や動物の面倒を見たりと優しい一面もある。

因みに『田上』姓は『壮吉爺さん』から貰った物で、
『執斗』の名前は捨てていった母親が名付けた物。

「闇に抱かれて・・・永久に眠れ!!」

Ｐｒｏｆｉｌｅ？　『村咲紫』

村咲　紫　～むらさき　ゆかり～

ＣＶ：能登麻美子（乃木坂春香の秘密『乃木坂春香』）

性別：女

年齢：１５歳　（５月２５日で１６歳）

身長：１５５ｃｍ

本作品のヒロイン。
『夜桜町』に境内を持つ、ある神社に住んでいる女の子。
実は人間ではなく『ワーキャット』という亜人族の一人。
両親及び神社を管理している老夫婦も『ワーキャット』の一族。
ある程度の『魔法』を使うことが出来、時折町で悪さを働く下級の妖魔を倒している。
尤も、下の中～上級の妖魔は『壮吉爺さん』にお任せしている。
そのため『壮吉爺さん』と面識があり、執斗の事も壮吉を通じて知っている（気付いたのはかなり後だが）。
『暁の会』に登録してはいないが、戦闘用ディバイザーのテスターもしている。

性格は明るく天然、そして少し恥ずかしがり屋。
ドジな面もあり、何も無い所ですっ転ぶこともしばしば。

両親は洋裁企業の重役で忙しく、紫は親戚の老夫婦に預けられているが、
親子仲はとても良い。

「あのっ村咲紫と言います、これからその・・・よろしくお願いします！」

†1†　『Ｆｌａｐｐｉｎｇ　ｔｈｅ　Ｅｂｏｎｙ　Ｃｌｏｔｈｅｓ』（前書き）

補足説明『戦闘用ディバイザー』について。

・亜人種の研究によって生まれた副産物である。
科学とは違う超常の力『魔法』によって確立された。
今の所『妖魔』に最も効果のある対抗手段。

『詠召盾』と呼称する事がある。

ついでにＯＰも。

ＯＰ　水樹奈々『Ｓｃａｒｌｅｔ　Ｋｎｉｇｈｔ』

†1† 『Flapping the Ebony Clothes』

夜桜町は他の市町村は愚か、どの都道府県とも違う特徴を持つ。

それは亜人種が人間と共に暮らしている事だ。

亜人種とは、動物的特徴を持った人種全般の事を指す。

哺乳類の特徴を持つ者もいれば、爬虫類や鳥類の特徴を持つ者もいる。

彼等は何故動物的特徴を持って誕生したのか。

原因は一体何なのか。

事細かな詳細が、まだ解き明かされていない。

そして彼等が姿を見せ始めた頃。

それを期に、異形の『妖魔』が姿を現す様になったのも、また事実なのだ。

「ふぅ・・・これで良し」

最後の荷物が包装用のダンボールへ放り込まれ、ガムテープで封をする。

あるのは骨組みだけとなったベッドと、がらんどうになった部屋のみ。

持っていた僅かな持ち物は、全て目の前の二つのダンボールの中。

そんな部屋に佇む青年の背には、これからの生活で必要な物が詰まった

リュックサックが背負われ、直ぐ傍には冊子が沢山入った紙袋が置かれていた。

ダンボールを外の道路に置き、紙袋の中身を頻りに覗いたり冊子を読み耽っていると、

ヴォォォォォオン！！！！

「――爺ちゃん！！」

「おはよう執斗」

けたたましいエンジン音と共に、青年の前に一台のサイドカー付きのバイクが停まる。

ヘルメットを外した初老の老人が、青年に声をかけた。

「待たせてしまったかの？」

「いや全然、教科書が面白くて気にならなかったよ」

余り気にする風でもないようだ。

受け答えをしながら、青年はせっせと段ボール箱をサイドカーに運び込む。

どうやら青年が乗るための物ではないようだ。

「じゃあ、気をつけて来るんだぞ？」

「分かってるよ、でもどうせならサイドカーに乗せてくれたほうが――――」

「それではお前にとって意味が無い」

青年の少々甘い考えはお見通しだったらしく、老人の言葉ですぐに一蹴される。

サイドカーにダンボール箱が積まれると、老人はまたヘルメットを被りなおし、

再び愛用のバイクに跨る。

「これも経験と言う物だ、ではまた後ほどに、荷物はあっちの家にしっかりと
届けておくからな」

「分かったよ・・・ありがと爺ちゃん、また後でな～！」

再び轟音を響かせ、老人の乗ったバイクが青年の許を走り去ってい

く。

手を振りその様子を見送ると、地べたに置いたリュックをまた背負い、

「今までお世話になりました・・・・・・っと」

自分が出てきた宿舎に一礼を送る。

今まで自分を住まわせてくれ、眠りを守ってくれたその建物に、感謝の意を込めて。

「さてっと・・・そろそろ行くか、定時通りの電車に乗らなくちゃな」

後ろ髪を引かれながら、名残惜しい気持ちを胸に、宿舎を去る。

そして、新たな住まい、新たな生活の待つ『桜町』を目指して、踏

み出してゆく。

◆
◆

「・・・・・・参ったな」

何回か電車を乗り換え、昼時になっていたので何処か店に寄ろうと思って駅を出たのは良かった。

良かったの、だが。

「・・・此処、何処だ？」

駅に戻る道が、分からない。

何分こういった事は初めてだ。

今まで『仕事』の時以外は外出したことなんて殆どない。
爺ちゃんに連れられて湖に行った事はあったが、街中を独りで、と言う事は初めてだ。
「これも経験だぞ、執斗よ」と、頭の中で爺ちゃんの声が響く。
・・・・・・しかし、ホントに参ったな。
駅に戻れさえすれば、確かあと何駅かで桜町なはずなんだけど・・・・。
むむむむ・・・・・・地図は貰ってるから、歩いて行くか？
でも、着く頃には夜になるなぁ・・・・・・参ったな。

『――あのっ止めて下さいっ！』

「・・・・ん？」

ビルの間、路地裏の方から、何やら女の子の悲鳴らしい声が。
その方向を覗いてみると、

「やっ・・・止めて下さい・・・っ」
「いいじゃんよぉ可愛い嬢ちゃん！」
「新しい服汚してくれた礼はお茶するだけで勘弁してあげるからさぁ？」

何処からどう見ても、同じくらいの年の銀髪の女の子が柄の悪い奴等に絡まれていた。
女の子の方は、必死に掴まれた腕を振り払おうともがいているが、ガッチリと掴まれていて無理なようだ。
・・・・・そう言えば、爺ちゃんがこんな事を言ってたっけか。
『女の子が困っていたら迷わず助ける事、最初はこれさえ守れれば良い』と。

・・・・・・よし。

「お嬢ちゃんには、タップリ体で返してもらグァッッッ！！？？」

一番手前にいた奴に、まずは脇腹に蹴りを一発。

まともに蹴りを喰らったソイツは、体をビクつかせて動かなくなった。

何だ、強そうなのは見た目だけ、中身は三下以下か。

「てめぇ何してガァッッ！？！」

「何って・・・そこの女の子、困ってるじゃん」

もう一人の顎にアッパーをブチかましてダウンさせながら、事も無

げに言う。

「正義の味方ぶってんじゃねぇぞ！！」

「うおっと」

リーダー格の男が、何処からか取り出したナイフで切りつけてくる。

手持ちのディバイザーでカードから取り出したのだろう。

だが、

「そんなんじゃ俺は斬れないよ、オジサン？」

「何をっぐがぁっっ！？」

大きく振られたナイフを避けると、がら空きになった懐を殴る。

痛みと衝撃に、男の体がくの字に曲がる。

「っくしょぉ・・・・・・・」

「にっ逃げるぞ！！」

「このクソガキィ！！　覚えてろよ！？」

「ああ、お前等の凄惨な負けっぷりはキチっと覚えておく」

よろめきながら、そして倒れた仲間に肩を貸しながら、チンピラ共は逃げていった。

「・・・・・・・・・・・・」

「その・・・大丈夫か？」

ついさっきの光景を見て腰を抜かしたのか、地面にへたり込んで放

心状態の
女の子に声をかけ、手を差し伸べる。

「・・・ふぇっ！？　ええと、その・・・・・・」
グギュルルルル・・・・・・
「あ・・・・・・・・・」

彼女が俺の手を取った途端、俺の腹の虫が大きな音を立てた。
・・・すっごく恥ずかしい。
だけど、

「・・・ふふっ」

どうやら彼女の緊張は解(ほぐ)れたようだった。

「――じゃあ、村咲さんは桜町に住んでるんだ？」

「はい、田上さんは桜町に御用ですか？」

「うんまぁ・・・今日からそっちに住む事になってさ」

近くのファストフード店に入り、買ったばかりの出来立てのハンバーガーを

頬張りながら答える。

目の前には、さっきチンピラから助けた銀髪の女の子――村咲紫さんがいる。

「お礼をさせて下さい」と言われここに来たのだが、流石に女の子に奢って

貰うのは何とも後ろめたい気がした。

でも、誰かに感謝されるというのは悪い気がしなかった。

「お年は幾つですか？」

「えっと・・・15、地元の高校に通うことになってる」

「もしかしたら、同じ学校かも知れませんね」

「そうだな」

因みに彼女は桜町に住んでいて、今日は偶々遊びに来ていたとの事。
そこで偶然先ほどのチンピラに絡まれ、俺がそれを助けたと言うのが事の顛末だ。

「あっお金なら私が――」

「自分の分なら払えるし、それに道案内までお願いするんだから払わせてくれないか？」

レジで会計をしようと並ぶ村咲さんを制止する。

世話になりっぱなし、と言うのは男としてどうだろうか。

それに・・・。

「・・・・・・それに、一期一会って言うしな」

「え・・・？」

「あぁいや、何でもない」

何だか余計なことまで際限無く話しそうになったので、

代金を払ってさっさと店を出ることにした。

・・・・・・そう言えば。

（村咲さんの名前、どっかで聞き覚えがあるな・・・・・・）

そう、つい最近、村咲さんの名前を聞いた覚えがある。

それを他でもない爺ちゃんの口から、だ。

（・・・まぁ気のせいだよな）

こんな見たことの無い普通の可愛い女の子の名前が、爺ちゃんの口から出る訳無いな。

「くそ・・・・・・あんな正義の味方気取りのガキに・・・・っ！」

「舐めた真似してくれやがって・・・・！」

その頃、執斗に撃退されたチンピラ達3人は悪態をつきながら街の路地裏に屯(たむろ)していた。

まだ執斗にやられた所が痛むのか、動く度に顔を顰める者もいる。

「あんのクソガキがぁっ！！！！」

特に、リーダー格の男はかなり荒れていた。

傍にあったゴミ箱を苛立ちを込めて蹴り飛ばした。

「・・・あら、一体何を苛立っているの？」

と、そこへ、外套をスッポリと被った謎の女性が現れる。

「おうおう姉ちゃん、こんな所でどうしたんだよ？」

「俺達と遊びにでも来たのか？」

下っ端分の二人が詰め寄るが女は二人をスルーし、リーダー格の男に歩み寄る。

リーダー格の男が警戒して身構えると、女は徐(おもむろ)に懐から一枚のカードを取り出し、男に差し出した。

「これを使えば、あなたは『力』を手に入れることが出来る」

「『力』・・・？」

「ムカついている相手に仕返ししてやりたいんでしょ、彼方達も」

と、今度はスルーした二人にも同じカードを差し出す。

「この中には何が入ってるんだ？」

「さあ・・・・・使ってみてのお楽しみよ？」

（あのガキに仕返ししたい）

（痛い目にあわせてやりたい）

（力が、欲しい）

（（（あのガキが・・・・・・憎い！！！！））））

憎憎しげな表情が、カードを持った彼等の顔に瞬く間に表れてゆく。

そして彼等は躊躇する事無く、一人、また一人と手持ちのディバイザーにカードを挿入していく。

「ヴゥ・・・グウウウウウウッッッッ！！！！」

「ガアアアアアアアアッッッッ！！！！」

男達の姿が、見る見るうちに豹変してゆく・・・・・化け物へ。

異形の怪物、『妖魔』へと。

「さぁ・・・思う存分暴れてらっしゃい・・・♪」

男達のその様を、女性は妖艶な笑みを浮かべながら眺めていた。

◇
◇

「あの・・・ありがとうございます」

「ん？　別に良いよこれくらいは」

既に日が傾き始めた、午後の４時。

俺は漸（ようや）く目的地である『桜町』の最寄り駅に到着した。

・・・・・・大量の買い物袋と共に。

町までの案内のお礼を兼ねて、彼女――村咲さんの買い物に付き合ったのだ。

・・・・・・まさか女の子が此処まで買い物に時間をかけるとは思わなかったが。

「・・・・・・これも経験、か」

「？　どうしたんですか？」

「いやっ何でもない、それより――」

一旦地面に買い物袋を下ろし、腕を回す。

「――荷物なんだけど、良かったら家まで持ってくけど？」

「いっいえそんなっ悪いですよ」

「でもこれ、結構重いよ？」

地面に下ろしていた買い物袋を再び両手に持って、試しに持ち上げて見せる。

相当な量の買い物をした事を物語るその重さは、とても女の子一人に持てる軽さではない。

尤も、これだけの嵩張(かさば)る量を持つのは大の大人でも難しいと思うが・・・・・多分。

「あはは・・・ちょっと買い過ぎちゃいました・・・」

「色んな店回ったな～そう言えば」

文房具屋では女の子用の可愛いシャーペンや消しゴムを買っていたし、

雑貨屋では小物類やぬいぐるみなんかを購入した。

両手に持った買い物袋には、ファンシーなデザインの雑貨が溢れている。

・・・・・・浮(うわ)ついた雰囲気の店が多かったけど、面白かったなぁ。

「・・・・・・・・・ふふ」

「？　どうしたんですか？」

「いいや、なんでもないよ」

自然と、頬が綻(ほころ)ぶ。

これから過ごす新しい日々には、こんな驚きと嬉しさを感じられるのか・・・。

そう思うだけで、何だか楽しくなってきた。

夕焼けに照らされた遊歩道、春のそよ風にさわさわと揺れる街路樹。

優しく長閑（のどか）な雰囲気が、緩やかに辺りに流れてゆく――――。

――ドゴォオン！！！！

――――はずだった。

「ヒャアっ?!」

「っ・・・!?」

突然、俺達二人の直ぐ傍に建っていた雑貨屋の壁が崩れ、瓦礫と共に土煙が辺りに立ち込める。

煙自体は、吹いた風によって直ぐに霧散し、周囲の様子がまた見えるようになる。

だが煙が晴れた向こう、崩れた瓦礫のある雑貨屋の方から。

『グゥゥゥゥ・・・・・・』

妖魔。

悪魔の様な風貌の妖魔が二体。

『ヴァァァァァァアアア！！！！』

そしてその二体を引き連れるように、さらに禍々しい容姿の妖魔が姿を現す。

穏やかな駅前が一変、怯える人々の阿鼻叫喚が響き渡る。

「・・・・・・ったく、人が漸く町に着いたと思ったら・・・・・・」

いや、分かっていた事だ。

なんせこの町は『妖魔出没率ナンバー1の地区』なんだ。

今日は現れないだろうなんて見通しは、余りにも甘い物だ。

「・・・・・・村咲さん、逃げろ」

「あ・・・・・・・ぁ・・・・」

「っ・・・ちょっと悪い！！」

「へっひゃあっ！？」

腰を抜かして動けない様子の村咲さんを横から抱え上げ、近くの物陰に下ろす。

『ガキィ・・・・・・アノクソガキィ・・・！！』

『ニクイィ・・・アノセイギノミカタキドリノガキガァ・・・！！』

『コロス・・・コロスコロスコロス！！！！！』

・・・・・しかもこっち向いて喋ってやがるって事は・・・俺を御所望みたいだな。

「ここにいてくれよ、危ないからな」

「えっでも田上さんは・・・？」

「・・・・・ちょっと相手をしてくる」

「えっあのっ？！」

それだけ言い残し、手荷物の中からある物を取り出す。

金属製の手帳（キャリーブッカー）と一一つの腕時計（ディバイザー）。

キャリーブッカーを腰に、そしてディバイザーを左手首に取り付けスイッチを入れる。

「うおっ・・・・・・？！」

『グガァッッ！！？』

スイッチを入れた瞬間、待機状態のディバイザーが眩い光を放ちな

がら、

「これが・・・・・・俺の・・・・・・・！！」

「え・・・ふえええええええっっ！！？」

その形を、菱形の結晶をモチーフとした盾へと変える。

そして独りでに側面の菱形がスライドし、カードを入れるスロットが剥き出しになる。

腰のブッカーを開き、数あるカードの中から一枚を選んで抜き取る。

紫と黒に彩られた身体を広げ、頭頂部に一つだけある紅い眼を妖しく光らせた

エイが描かれたカードを、右手で妖魔へと向けて突きつける。

『グァウウウウウウ・・・・・・』

異様な程大きな力を、手に持ったカードから感じる。
このカードに込められているモノがどれだけ異質な物なのかを
3体の妖魔も感じ取った様子でたじろぐ。
実際に使うのは、今日が初めてだ。
けれど不思議と、不安な気持ちにはならなかった。

「――変身！！！！」
〈ＫＯＫＵＩ――――〉

手にしたカードをひっくり返し、ディバイザーのスロットへと挿入させる。
そして開いたスロットのカバーを再び閉じ、カバーを軽く叩いた。

〈――――ＤＥＮＳＨＯ！！〉

「うおおおおおおおおっ！！！！！」

『ガァウウッ？！！』

「きゃあっ！？」

機械的な音声が響き渡ると同時に、俺の身体の回りに漆黒の闇のような黒い色をした

旋風(かぜ)が巻き起こる。

吹き荒れる旋風(かぜ)が、俺の姿を瞬く間に変えてゆく。

さっきまで着ていた服は旋風によって全て消し飛び、黒い靄が体に纏わり付く。

靄が上半身を覆うと途端にYシャツの様な衣服とトレンチコートが袖を通り、

両手は指先を露わにした薄手の手袋が包み込む。

下半身にも同じく靄が覆い、ズボンとミリタリーブーツとなる。

服装自体に、特に特殊な点は見当たらない。

だが。

ズボンも、シャツも、ブーツやトレンチコートに至るまで。

着ている衣服の全てが、真っ暗な闇夜を其処に溶かし込んだ様に黒い色に染まっている。

黒く染まっているのは、腕に着いているディバイザーも同様だった。

ただ、カードスロットのカバーだけが、その一箇所だけが真っ赤な配色となっている。

スロットへ挿入したカードに描かれていた、あのエイの紅眼を彷彿とさせる。

『コロスウウウウウッッッ！！！！！』

3体の妖魔の内の一体が、沈黙を破ってこっちに突進を仕掛けてくる。

が、それは余りにも隙のあり過ぎる攻撃だった。

「はあっっっ！！」

『グアアアアッッッ！！！！？』

突き出した爪が届くよりも早く、妖魔の腹にローキックを叩き込む。

そのまま突っ込んできた方向に吹っ飛び、その妖魔はピクリとも動かなくなった。

対して俺は先制される前に先ほど倒した妖魔と対になっていた、
もう一体の懐を目掛けて走りこむ。
殺気を感じ、対の妖魔が迎え撃とうと腕を構えたが。

「おらあっっっ！！！」
『ガアグァッ！？！！』

妖魔が反応するよりも早くがら空きな懐に入り込み、その顔面に拳を叩き込む。
相手への確かな手応えを感じながら、拳を振り切る。
殴られた妖魔が顔を押さえて悶えるのを尻目に、奥に立つ最後の一体に目を向ける。

『ヤッタナコゾオオオオオオオ！！！！』

子分らしい二体が地面に這い蹲(つくば)る姿を見せ付けられ、
激昂したリーダー格の妖魔が爪を光らせ特攻をかけてくる。
（確か爺ちゃん・・・・・・『技』が使えるとか言ってなかったか・・・・・・？）
連続で突き出される爪を腕で払いながら、頭の中で手順をリフレインさせる。
変身時と同じ動作で、スロットカバーを軽く叩く。
カバーとその周りが、スイッチの様に押し込まれる感覚を手の平に感じた。

〈Ｒ．Ｋ．Ａ，　Ｉｎｖｏｋｅ！！！〉

グワアッッッ！！！！！！！

電子音が鳴り響くと共に、俺の頭上に複雑な図形が複数組み合わさった陣が現れ、

その陣が通過した空間に巨大且つ異様な生き物が、奇妙な鳴き声を上げて姿を顕す。

それはつい先ほど俺がディバイザーに挿入したカードに描かれていた、

真っ赤な一つ眼をギラつかせた、紫紺と漆黒の身体を持ったエイだった。

その件(くだん)のエイの身体から紫色のオーラが発せられ、

俺の両手足、つまりは四肢がオーラと同色のエネルギーを覆い、鋭利な爪の様に変化する。

「おおおおおおおおおおおおおっ！！！！」

コンクリートの地面を、思い切り蹴る。

ベキッと地面が罅(ひび)割れる音がしたかと思うと景色が後ろに吹っ飛び、

直ぐ目の前に最後の一体である妖魔が迫る。

肉薄した勢いを乗せて右腕の爪で妖魔を地面に叩きつけ、左で今度

は思い切り宙へ打ち上げる。

少し離れた所に鈍い音を響かせて落ちてくるのを見届けると、すぐさま地面を蹴って飛び上がる。

それと同時に、後ろで待機していたエイが滞空している俺の周りを旋回し出し、

俺の身体全体を爪と同色のエネルギーで包んでゆく。

そしてエイがガパッと大口を開け、

「喰らいやがれえええええええっ！！！！」

俺を地面で身動きが取れないでいる妖魔目掛け、黒色のエネルギーと共に打ち出した。

その瞬間、

『グガアアアアアアアアッッッ！！！！！！！』

『ガアアアアアアアアアアアっっ！！！』

『グゥオオオオオオオオ！！！！！』

突き出した右足がリーダー格の妖魔にヒット、衝撃で吹っ飛んだソイツに

残り二体の妖魔が巻き込まれ、三体同時に轟音をたてて爆散する。

もうもうとした煙が晴れたその場所に倒れていたのは・・・・・・、

「あ・・・・・・こいつ等は・・・・・・！」

路地裏で村咲さんに絡んでいたチンピラ三人が、ボロ雑巾のような姿で

地べたに這い蹲(つくば)っていた。

・・・・・・うん、完全にノビてるな、ピクリともしねぇ。

ヴォンヴォオオオォォン！！！！

「ん・・・あのバイクは・・・もしかして・・・！」

「――――おぉい執斗～！！」

瓦礫の転がる悪路を諸共せず、愛用のバイクで壮吉爺ちゃんがやってくる。

・・・ただ、今朝見たサイドカーは付いてなかった。

「爺ちゃん！」

「お疲れ様じゃったな執斗、周囲一帯の整備は業者を呼んでおいたから気にせんでよろしい」

「・・・っつーか爺ちゃん帰ってたのな」

「お前の新居に荷物を置いてきた矢先にコレじゃからのぅ・・・」

「気にすんなよ爺ちゃん、どうせいつもの事だし・・・・・・て、ん？」

「？　どうしたんじゃ？」

何だ・・・？

何かを・・・・・・いや。

…誰かを忘れてる気が・・・・・・・？

「・・・・・・あ、ヤベ？！」

爺ちゃんが声をかけるよりも早く、近くの物陰に駆け寄る。

「あうぅ・・・・・・あっ田上さん！！」

「ゴメンな、待たせちまって・・・もう大丈夫だから」

そこには、戦闘の前に避難してもらっていた村咲さんの姿が。

長く待たせたお詫びをしながら、手を引いて立ち上がらせる。

戦いのとばっちりを受けた所は・・・・・無さそうだ、良かった良かった。

「は、はいっありがとうございます、あのぉ・・・・・・？」

「・・・ん、どうした？　何処か怪我でもしたか・・・・・・？」

「いえっあのっ、もしかして田上さんは暁の・・・・・・？」

と、村咲さんが俺の後ろを見るようにして身体を傾ける。

俺の後ろには、バイクを押してこっちに来た爺ちゃんがいる。

「あれ・・・・・・壮吉お爺さんですか？」

「え・・・・・・・爺ちゃんの事知ってる・・・・・・・？」

「おぉ・・・・その声と銀髪のお嬢さんは・・・・村咲紫さんではないかのぅ？」

「え・・・・どういう事？？？」

・・・・・・・・・待てよ？

確か爺ちゃん、かなり前に「桜町には協力者がいる」とか言ってなかったっけか・・・？

んで、ソイツの名前は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ。

「あああああああっ！！！　思い出したっっっ！！！」

「何じゃ・・・てっきり知っていて一緒にいたモンかと思ったぞ？」

「？　何の話ですか？」

そうだ、そうだった。

確かにあの時爺ちゃんの口から出た名前は・・・・・・『村咲紫』だった。

村咲さんが『協力者』だったなんて・・・・・・・・・。

・・・・・・こんなマンガみたいな偶然が、本当に起こるとは。

「実はのぅ村咲さんや、コイツが今日から此処の配属になった・・・」

「あ・・・やっぱり『暁の会』の・・・！」

「・・・・・・まさか協力者が村咲さんだったなんて・・・素直にビックリだ」

地平線に沈む夕焼けが、真っ青だった空を真っ赤に染める夕暮れ時。

俺と村咲さんは、神が定めたかと思うほど運命的な出会い方をした。

これが俺の『夜桜町』での新しい生活の序章（プロローグ）だった。

～To be continued!!～

†2† 『春のうららと月夜の銀光』（前書き）

かなり長くなった・・・

†2†　『春のうららと月夜の銀光』

PiPiPiPi！　PiPiPiPi！　PiPiPiPi！

「ん・・・・・・ぐ・・・・・・」

繰り返される目覚ましの音。

そして、開け放たれた窓から入ってくる、暖かな朝日。

「・・・・・・そうか・・・俺・・・」

一瞬ここは何処だと思い、それと同時に『ここは俺の新しい家』という事を思い出す。

そうだった、俺は昨日『この家』に引っ越してきたんだった。

「・・・・・・・昨日、か・・・・・・・」

昨日、初めて『夜櫻町』に足を踏み入れた時の高揚感。

これからの生活に対する期待感。

今まで余り、感じた事の無かった上向きな気持ちをリフレインし、かみ締める。

「・・・・・・・・・・・・・・・げ」

但し、目覚ましの針は午前４時を指していた。

今日は入学式なんだが、幾らなんでも早く起き過ぎた。

・・・・・・生活リズムの方はは、まだまだ改善の余地がありそうだ。

「目は覚めてるし・・・起きるか～」

ぬくぬくとしたベッドから這い出て、部屋備え付けのクローゼットを開ける。

そこには黒地に白い刺繍が入ったブレザーと、それと同色のズボン、そして真っ白なYシャツがかかっていた。

これが、俺がこれから通う高校『夜櫻学園』の制服だ。

真新しい制服に腕を通すと、新品特有の垢抜けない感じの匂いが漂ってくる。

2、3度腕を曲げ伸ばしてみる。

着心地も良いし、何より動きやすい。

「これで・・・良しっと」

最後に真っ赤な布地に白い斜め掛けのラインが二本奔ったネクタイを締める。

普段の――――『暁の会』での服装がダークスーツだった事もあったから、

難無く着替えを済ませることが出来た。

「へぇ・・・・・・結構格好良いな」

元々、ダークカラーが好きな性分なのだ。

白く縁取られ、尚更黒が強調される意匠。

これはいよいよ気に入った。

大事に、大切に、３年間着て行こうじゃないか。

俺、田上執斗の生活はかなり偏っている。

起きるのはとても早く、夜はとても遅い。

朝は簡単――手軽な携行食品で栄養を摂り、夜は逆にガッツリ食べる。

『妖魔と戦う』という特殊な事情を孕んでいても、だ。

そして今日は、うっかりして携行食を買い溜めしておくのをすっかり忘れていた。

仕方なく炊飯ジャーで白米を炊くことにしたが、如何せん時間が掛かる。

家には大きなデジタルテレビが据え置かれているが、見たい番組なんてない。

いや、今まではテレビを意識して見た事なんて一度も無かった。

よって、テレビで暇を潰すという案も不意になった。

トレーニングは・・・・・・折角来た制服が直ぐに汗だくになってしまうので却下だ。

そこで。

「ふ～・・・・・・気持ち良いな・・・・」

まだ日が明け切らない薄暗い住宅街を、自転車で疾走する。

まだこの辺の地理には疎いからあまり遠くには行かないが、誰もいない街道を

真新しい自転車で走り抜けるのはとても心地が良い。

「・・・・・・ん、あれは・・・・・・・？」

と、進行方向に上まで続く石造りの階段が見えてきた。

上まで伸びる階段の両側には、青青と茂った木々が生い茂る。

何とも趣のある場所だ。

自転車を止め、かなりの段数を誇る階段を一段飛ばしで駆け上がっていく。

タンタンタンとリズミカルな足音が響き、両側の林が視界の後ろへ消えてゆく。

「っハァ・・・ハァっ・・・ハァ・・・はぁ」

最後の二段をジャンプで飛び越え、踏破完了。
膝に手を置いて息を整え、辺りを見回す。
・・・・・・どうやらここは、神社のようだ。
振り向き様に目線を上に上げると、真っ赤な鳥居が目に映る。

「・・・おっ」

ふと上ってきた階段の方を見ると、住宅地を見下ろす位置にいたことに気が付いた。
遠くの方には大きなビル群が霞んで見え、至る所に桜の木らしき桃色の塊がポツポツと見える。
・・・なんと言うか、写真に収めたいくらい綺麗な風景だ。

（・・・・・・あ、カメラならあるじゃんか）

手持ちのケータイにフォト機能がある事を、今更ながらに思い出す。

「――あの～？」

「・・・んぅ？」

ケータイは何処に仕舞ったかなと胸ポケットを弄(まさぐ)っていると、

後ろの方から声がした。

少し遠慮がちな女の子の声。

それは、つい昨日知り合ったばかりの女の子の声。

「まさか・・・・・・村咲さん？」

「田上さんっ！！　やっぱり田上さんでしたっ！！」

振り向くとそこには、真っ白な銀髪が印象的で、且つ昨日道案内を頼んだ、

箒を脇に携えた村咲紫さんの姿が。

ただ、昨日と明らかに違う点が、二つほど。

服装が違うのは言わずもがな・・・・・・・・『巫女』と呼ばれる人の装束だ。

問題は、彼女の頭の上でぴくぴくと動く――――――――猫の耳だった。

「紫さんてもしかして・・・・・・亜人だった？」

「はれ？　言ってませんでした？」

さも驚くように片手で自分の耳（猫耳）を摘まむ。

・・・・・・驚いてるのはこっちなんだが。

「そう言えば、昨日は帽子を被ってましたから・・・」

「あー・・・そうか、合点がいった」

「ところで・・・――――」

と、今度は村咲さんが小首を傾げながら一言。

「――どうして家の神社に田上さんが？」

「ん～・・・まぁその、何つーか・・・・・・」

とりあえず、朝早く起き過ぎた事とご飯が出来るまで外をぶらついてるという事だけ話す。

話を聞いている時も、村咲さんの猫耳が忙しなくピクピクと跳ねる。

「――そうなんですか～」

「っつーか、村咲さんもこんな朝早くにどうしてそんな格好で？」

「私は境内のお掃除をしてたんです、小さい頃からの日課みたいなモノなんです♪」

と言って巫女装束の袖口を摘まんだかと思うと、クルっと身体を一回転させて見せる。

日を受けてキラキラと輝く銀髪と共に、巫女装束がハラリと揺れる。

とても楽しそうに、とても誇らしげに、村咲さんが微笑む。

――――トクンっ。

「・・・・・・・？」

そんな村咲さんの姿を見ていると、突然心臓が鼓動を一拍素っ飛ばしたのを感じた。

『ドクドク』とも『どきどき』ともとれる心臓の音。

何となく、顔も熱を帯びている気がする。

・・・・・・風邪・・・な訳はない・・・はずだ・・・・・・多分。

――ぐぅ～ぎゅるるる・・・・・・

「・・・あ」

そんな心臓の音に割り込みをかけるように、別の音が。

大仰に鳴る、空腹を知らせる人間独自のパラメータ。

音源は・・・・・・言うまでも無く、俺の腹からだ。

流石に腹ペコの状態で自転車を飛ばしたのは中々腹に堪えるというか、空腹感が三割増しで襲ってくる。

うぅ・・・・・・腹減った・・・・・・・・・・・・・・。

「あっそうだっ！」

「・・・う？」

と、村咲さんがそうだとばかりにポンと両手を叩く。

「良かったら、家でご飯食べていきませんか？」

「え、わりぃよそれは・・・」

幸い、家まではそんなに時間が掛かる訳じゃない。
それに、ジャーにご飯を炊きっぱなしで行くのは・・・・・・でも腹は減ったし・・・。

「――おやぁ、どうしたんだい紫～？」
「――ん～？　そこの坊主は誰じゃあ？」

声のした方へ首を向けると、そこには和服に身を包んだお婆さんが一人。
そして隣には、袈裟を身に付けたお爺さん。
どちらも、壮吉爺ちゃんと同じくらいの歳に見える。

「あ、お爺さんっお婆さーん！」

あ～なるほど、あの二人は村咲さんの身内の人か。

お爺さんの方が坊さんの格好をしてるのが何よりの証拠だ。

「まだご飯とおかずって残ってましたか～？」

「ああ大丈夫だよ、今日は少し多く炊き過ぎちゃってねぇ・・・」

「紫ちゃんや、もしかして～そこの坊主にか？」

「はい、田上さんにお出ししても良いですか？」

「あぁいいよ～」

「さぁ早く、家に上がりなさい坊主」

・・・・・・何と気前の良い人達なのだろう。

結局。

俺は村咲さん家族3人に勧められるがままに家に上がり込み、朝食を頂いた。

感想は・・・・・・・・・とても美味しい、この一言に限る、いやこれしかない。

家の炊飯器の白米は・・・・・・夜にでも食べる事にしよう。

「お待たせしました～っ」

村咲家で朝食を頂いた後、一旦俺は家へと戻って荷物を取り、再び徒歩で村咲家の神社へ。

何故戻ってきたかと言えば、村咲さんのお爺さんが「女の子を一人で行かせるのは不安で不安でしかたがない」との事。

お婆さんの方も「一緒に行ってやってくれませんか？」と頼んできた。

朝飯の件もあったし、それくらいなら幾らでもお安い御用だ。

そして何故徒歩なのかと言うと、村咲さんが通学用の自転車を持っていないと言ってきたから、だ。

「おう、さぁ行こ・・・・・・う」

「？　どうかしましたか？」

きょとんとした顔を俺に向ける村咲さん。

・・・・・・・・・正直に表現するなら、見惚(みと)れていた。

――白を基調とし、青のラインとアクセントが爽やかなセーラータイプの制服。

――朝日を浴びてキラキラと輝く、雪の様に真っ白な髪。

――そして、眩しいくらいに嬉しそうな笑顔。

「・・・・・・綺麗だな・・・」

「ふぇ？」

「っ！！　イいやっ何でもないっ・・・・・・・行くか」

「・・・？？」

・・・・・思わず思ったことが口に出ちまった、反省反省。
おまけに心臓の動悸が激しくなってきやがった、別に心臓に持病持ってるわけじゃねぇのに。

（一体何なんだ・・・これは・・・・・？）

◇◇

「――――で、中学までは女の子だけの学校に通ってたんです」
「ふーん・・・そうだったのか」

日はすっかり昇り、街が明るく照らされる時頃。
車が行き交いだした道路を渡り、街道を進みながら互いの昔話に花を咲かせる執斗と紫。
紫の女子校に通っていた時の話が済む頃には、両側を満開の桜の木が埋め尽くす、
学園までの一本の長い桜並木に差し掛かっていた。

「そういやぁ・・・この街って桜が多いよな～」
「春には沢山の花見客でここら辺の公園が人で一杯になるんですよ～♪」
「へぇ～・・・確かに綺麗だな～」
「でも、お昼ごろの桜はまだ序の口なんですよ?」
と、紫が何か含みのありそうな表情を浮かべる。

「・・・・・・？　どういう事だ？」

「実は・・・・・・・光るんです♪」

「？？？　何が？」

「この季節、夜になると桜の花びらが発光するんです♪」

そう、夜櫻町に咲いている多種多様な品種の桜のその全てが、夜になると桃色の光を放ちだすのだ。

桃色の光を発しながらひらひらと花弁が舞い散るその光景は、美麗且つ神秘的だ。

「そうか・・・・・・・って事は、花見をするなら夜がおススメって訳だ」

「はいっ♪　・・・・・・・あ、見えましたよっ！」

「ん・・・・・・あれか・・・」

紫の指差す方向には、校舎と思わしき大きな建物が現れる。
段々と桜並木が開け、学校を象徴する校門が姿を現す。

「おお・・・・・・」

これまた綺麗だな、と執斗が目の前の光景を目にしながら呟く。
そよ風に桜の木の枝が揺れ、その度に花びらがひらひらと舞い落ちる。

『都立夜櫻学園高等部』

この街に点在する高校の中では、大きい規模を持つ校舎と校庭。

普通科のみではあるが、周辺の高校の中ではかなりレベルの高い講義を受けられる。

――――と、執斗が街へ来る前に取り寄せた学校案内のパンフには書かれていた。

期待やちょっとした不安を胸に、二人は学園の門をくぐって敷地内へ。

周りには二人と同じ、真新しく且つ着慣れていない制服を着て校舎を目指す新入生達が大勢いる。

（こいつ等、皆俺と同い年か・・・・・・）

その人の多さに、そしてその人等の表情の幼さに、執斗は驚きを隠せないでいた。

無理も無いだろう、今までは自分よりも年上の大人に混じり、血生臭く殺気に満ちた戦いを

日夜繰り広げていたのだから。

そしてそんな日常に、笑顔が垣間見える事など、滅多に無いのだか

ら。

――――だが、これからの日常は、その限りではないだろう。

「何だか楽しみですね田上さんっ！」

「ああ・・・・・・！」

返事を返した執斗の表情は、期待と嬉しさで活き活きとしていた。

――ここでなら、今まで生きてきた場所では得られなかった『何か』を得られる。

――今まで体験出来なかった事を学んだり、知ることが出来る。

そんな期待感が、執斗の心を浮き立たせていた。

そして、そんな機会を与えてくれた壮吉ら『暁の会』の皆に、今一度感謝の念を送るのだった。

「は～・・・・・・やっと終わった・・・」

入学式が終わり、割り当てられた教室の席へ腰を下ろすなり、執斗がそうぼやく。

講堂での入学式、学園の長たる学園長の祝辞スピーチ。

そのスピーチが、かなり長い時間に及んだのだ。

本来なら１０時には教室に向かっているはずだったが、祝辞が終わっていざ時計に

目を移すと、時計の針は１１時を回っていた。

視線を周りに向けると「校長の話、長かったね～」と話し込んでいる女子達が目に映る。

「ここの学園長さん、話好きで有名だそうですよ？」

「・・・話好きな割には言葉に詰まってた気がするのは気のせいか

？」

中身の無い無味乾燥な内容だな、と心の中でつけ加える。

やたらと大人でも理解の難しい言葉を使っていたし、何より要領を得ない所か、

簡単な内容を難しく引き伸ばした感が丸見えだ。

あれでは聞いている方が苦になるのは間違いない。

（まぁ明日から授業が始まるし・・・・・・楽しみだな）

一般的な見解では、『学校での勉強』と言うのは人生最大のルーチンワークと言われている。

将来就くであろう大体の職業に於いて、歴史や古典といった学科は不必要であるからだ。

だが、執斗にとって高校での勉強は、公共の教育機関での初めての学習だ。

そんな彼にとってみれば、『学校での勉強』と言う名のルーチンワークでも、
非常に好奇心をそそる対象として目に映るのだ。

◇◇

担任との初顔合わせとクラスメイト同士の自己紹介が済み、直ぐに下校時間となる。
担任は初老の、３年生の倫理の授業を受け持つ男性教師だった。
壮吉爺ちゃんと同い年くらいだろうか、歳を重ねた者特有の気の穏やかさを感じた。
あと二年しなければこの人の授業を受けられない、と言うのは個人

的には残念だ。

と、まぁそんな事を考えながら。

「あっあそこですっ」

「お・・・結構デカイな」

俺は村咲さんに、街一番のスーパーマーケットに案内してもらっていた。

今朝は村咲さんの家でご馳走になった関係上、夕食のご飯におかずを作らなければならない。

尚且つ切らしていたエナジーメイト――携行型栄養食品――を箱買いするためでもある。

「エナジーメイトエナジーメイトっと・・・・・・あったあった」

少し奥まった棚に陳列されていたエナジーメイト。
近くには陳列前のエナジーメイトが入っていると思しきダンボール箱が二つ。

「・・・よっと」
「ふえっ！？」

陳列されていたモノと一緒に、箱詰めされたままのエナジーメイト二箱も持ち上げる。
ちょっと重いが、トレーニングと思えばまだまだ軽いほうだ。
・・・・・・横で村咲さんが素っ頓狂な声を上げていたのが、妙に気になったが。

「そっそんなに買うんですか・・・？」

「ん？　あぁ、まぁな」

因みにチョコレート味にはかなり長い間お世話になっている。
あのしっとりとした舌触りと仄かな甘みが何とも言えない。

「これ下さい」

「はい、かしこまり・・・！？」

レジに箱をドカッと置くと、店員が目を丸くした。

・・・・・初めて箱買いをしたときも、店員がこんな顔をしてたっけか。

「あ、代金の支払いはこれで」

そう断りを入れ、財布の中から、照明の光を受けてキラキラと光を放つ真っ白なカードを差し出す。

これは『暁の会』を金銭面で援助しているクレジット会社から発行されている物だ。

『暁の会』は、表向きでは『総合科学技術研究機関』と言う肩書き――もとい隠れ蓑を

持っており、このクレジットカードはその伝手で『暁の会』の職員でも極限られた者しか

持つことが出来ない代物だ。

今回は身の回りの物を揃える為、という事で壮吉爺ちゃんから借りてきたのだ。

「あの～・・・さっきのカードってもしかして・・・」

「あれは爺ちゃんのだよ、俺のじゃない」

買い込んだエナジーメイトやおかずの材料、それと新しい家具等を家まで

配送してもらうように頼んだ後に、村咲さんがカードについて訊ねてきた。

自慢じゃないが、俺はクレジットカードは使いたくない方だ。

お金を使っている感じがまるでしない、奇妙な感覚に襲われるからだ。

「やっやっぱりそうですよね」

「・・・そうだ、村咲さんに今日とこの前のお礼をしないとな」

村咲さんのお爺さん達には後で菓子折りを持っていくとして、だ。

・・・今回はまず村咲さんにこの前と今日の道案内のお礼をしないとな。

そう思って財布の残金（クレジットを除く）を確認する。

・・・・・・・うん、何か奢るには十分すぎるくらいにはお金があるな。

「え、そんなっ悪いですよっ」

「そうか・・・まぁしゃあないか、また次の機会って事で」

『何事も強引に進めてはならない』

これは俺がこの生活を送るに当たって、爺ちゃんが教えてくれた事の一つだ。

誰だって――勿論俺だって――強引に何かをされたら嫌だろうからな。

「今日はありがとな村咲さん、もう遅いし家まで送るよ」

「えっもうそんなに遅い時間ですか！？」

「『えっ』て・・・・・・」

かなり長い時間をスーパーのある商店街で過ごしていた。

もう既に太陽は地平線の向こうに隠れる寸前だ。

けれども、辺りはちっとも暗くならないのだ。

街灯に明かりが灯っているのもあるが、一番の原因は・・・・・・・・・。

「・・・桜の木が光りだしたから、空が暗くなったのに気付かなかったんだな」

「もうこんな時間だったんですね～・・・」

「幾ら明るいとは言え、一人で帰るのは危ないからな・・・構わないか？」

「はいっお願いします！」

ペコリとお辞儀をする仕草が、何とも可愛らしくて。
俺の元来硬かった表情も、心なしか少しだけ柔らかな物へと変わった気がした。

◇◇

「そう言えばちょっと気になったんだけどさ・・・」

日もすっかり落ち込み、夜空を星と点在する街灯、加えて発光する桜の木々が家路を照らす。
周囲の幻想的な光景に目を向けながら、執斗が隣を歩く紫に訊ねる。

「村咲さんのお祖父さん達って亜人じゃないよな？」

「はいっ亜人なのは私と、私のお父さんとお母さんなんですよ～」

「亜人なのか？」と言う一種の差別的な意味を孕みそうな問いかけにも、

特に気にする事もなくにこやかに答える紫。

桜の放つ光に照らされた仄暗い家路でも、その笑顔は輝かしく見える。

出会ってまだ幾日も経たない執斗でも、彼女が心の芯から優しく暖かなのが伺えた。

話題を紫の住まう境内の事に替え、暫く談笑をしながら薄暗い夜道を歩く。

紫及び彼女のお祖父さん達の住むあの神社では、刀剣に宿るとされる

九十九(ツクモ)神を祀っているそうだ。

そして境内へと続く長階段を昇り切った目の前に建っているお社(やしろ)には、

嘗(かつ)て戦国の世で実際に使用されていたとされる日本刀が安置されているとか。

自身の信念を貫き徹し、その刀を愛する者の為に振るった一人の侍の遺品だとか、

裏手の倉庫から見つかった古い文献に書かれている、との事。

「カタナか・・・・・神社にしては随分・・・・・・」

「普通だったら仏具とかなんですけどね・・・あ、着きましたっ」

会話が一区切りついた所で、境内兼紫の自宅へと続く長い階段の前へと到着。

階段の頂上付近がぼんやり明るいが、境内に根を張る桜の木の光だという事は今の執斗にも理解できた。

「それじゃあ、また明日」

「はいっさよなら～」

手を振る紫に釣られて執斗もまた手を降り返す。

それが済むと同時に、紫は執斗に背を向け長階段を駆け足で登りだす。

「さてと・・・俺も帰って飯にするかぁ・・・」

階段の天辺に紫の姿が消えるのを確認し、執斗も来た道を戻ろうと歩み始める。

今夜のおかずは何を作ろうか、などと主夫じみた事を頭の中で考えながら。

Ｐｒｒｒｒｒ！！　Ｐｒｒｒｒｒｒｒ！！

「・・・ん、何だ？」

家路を行こうとする執斗を制止するが如く、彼の懐のケータイが着信を告げる。

画面を見てみると、電話の主は田上壮吉。

「・・・もしもし、爺ちゃん？」

〔執斗、簡潔に用件を伝えるぞ〕

直ぐに通話ボタンを押し、壮吉の話す内容を聞き逃さんと耳を傾ける。

――普段のフランク且つ穏やかな声色は感じ取れず、心なしか少々焦っている。

平時とは違うその声色に、執斗も頭の中を瞬時に切り替える。

〔執斗、今すぐ紫ちゃんの神社に急げ、妖魔だ〕

「っ！！？」

『きゃあああああああっ！！！』

壮吉の簡潔な説明が終わるか終わらないかと言う内に、ソプラノ質の少女の悲鳴が鼓膜を貫く。

「まさか・・・ちぃっ！！」

〔ワシも今から神社に向かう、早く紫ちゃんの身の安全の確保を〕

「っ分かった！！」

乱暴にボタンを押して通話を切り、二段飛ばしで境内へと続く石階段を駆け上がる。

焦りで足をもたつかせながらも、何とか階段を昇り終える。

『グゥウウウウウウ・・・・・・』

「ええぃこのっこのおっ！！」

「お祖父さんっ危なっかしい真似は止めてくださいな！！」

境内では、清掃用の竹箒を振り回して妖魔を追い払おうと躍起になっているお祖父さん、

そしてそれを止めさせようと必死になっているお祖母さん。

そして、

「はぁっ・・・っはぁっ・・・」

身体の所々に傷を負い、膝をついて立ち上がれないでいる紫の姿が見えた。

「っこの・・・！！」

〈ＡＣＴＩＶＡＴＩＯＮ！！〉

左腕に付けたディバイザーを起動させ、腰のブッカーからカードを取り出す。

紫紺のオーラを纏ったエイ、そしてカードの内枠の四隅に書かれた

『黒衣伝承』の４文字。

「変身っっ！！」

〈ＫＯＫＵＩ，ＤＥＮＳＨＯ－！！〉

「うおおおおおおおおっ！！」

『ググアッッ！？！』

ディバイザーの機械質な音声と共に、黒い霧を巻き上げ風が身体を覆う。

全身を漆黒の黒衣が包むと同時に、目標の妖魔に突っ込んで飛び蹴りをかます。

地面を擦り、社の『奉納』と書かれた賽銭箱の前で停止する。

「二人共、早く逃げて！！」

「おぉ・・・お前さんは今朝の・・・！」

「おやまぁ・・・ホントだねぇ」

まず老人二人を先に避難させ、直ぐに無防備な状態の紫を助け起こす。

体中に傷を負っている少女の姿は、見ていてとても痛々しい物があった。

「大丈夫か!?」

「私は何とか・・・お祖父さん達は・・・?」

「先に避難させた、村咲さんも・・・っ!?」

『グゥオオオオオオ!!!』

紫の肩を支え階段を降りようとした執斗だが、怯んでいた妖魔の憤怒に狂った

雄叫びを耳にするなり、紫を抱き抱えて鳥居の陰に退避させる。

「田上さん！？」

「俺が奴を倒す間、そこに隠れててくれ」

「私も戦いますっ・・・・・・っ！！」

立ち上がろうとした紫だったが、足の傷が痛むのか、よろけて執斗に寄り掛かる形になる。

「そこにいてくれ」と念を押し、執斗はこちらを向いた妖魔と対峙する。

『ヴゥグアッ！！！』

「っらあっ！！」

『グウゥゥゥッ！！？』

敵妖魔の突き出した拳を、小盾《バックラー》と化したディバイザーで受け止め、

禍々しいその顔に仕返し《カウンター》と言わんばかりに拳を捻じ込む。

一瞬妖魔が怯んだが、今度は妖魔の方が執斗の肩を引っ掴み、力を込めて投げ飛ばす。

――ズゥゥゥウン！！！

「ぐあっ！！？」

「執斗さんっ！？」

投げ飛ばされた執斗の姿は、木製の戸を突き破って社の中へと消えた。

『グゥゥゥゥゥ・・・・・・・！！』

「あ・・・・！？」

のそり、のそりと。

緩慢とした動きで、再び無防備になった紫の元に妖魔が迫る――――。

◆◆

「っ痛ぅ・・・・・・・！！」

足は何とも無い、が、背中に痛みが奔る。

差し詰め背中から墜落したからだろうが、これはかなり時間をロスした。

早く妖魔を村咲さんから引き離さないと・・・！！

「・・・・・・ん？」

手をついて立ち上がろうとすると、不意に左手の掌に何やら硬い物が当たる。

墜落時に舞い上がった埃が晴れ、手元がはっきりと見えるようになると。

「これは・・・もしかして・・・？」

黒い漆塗りの鞘。

他の武器、刀剣類とは一線を違える流線型のフォルム。

日本刀。

これが村咲さんの話にあった『カタナ』か・・・・・・？

『グゥゥゥゥ・・・・・・・！！』

「っ・・・何でも良いっ！！」

今は、誰一人として怪我人を出さずに奴を倒すのが先決だ。

今は、村咲さんに近づいている妖魔の殲滅が先だ・・・。

武器を使ったことが無いなんて、言ってる場合じゃない！！

「っはあっっ！！！」

柄を握り、鞘から刀身を抜き放つ。

金属の刀と、木製の鞘の擦れ合う音と共に、刀の刀身が姿を現した。
壊れた社の戸から入る月と桜の光を受けて、白銀に鈍く煌めく刃。
切っ先の腹に刻まれた紋様に、美しさと同時に凄まじく強い力を感じ取る。

――――これならいける！！

「こっ来ないで下さいっ！！」

「！？」

村咲さんの声を聞き、急いで社の外へと出る。

――村咲さんの直ぐ傍に、先ほど俺を社まで吹っ飛ばした妖魔の姿が！！

「村咲さんに――」

地面を滑るように走り抜け、

〈Ｒ．Ｋ．Ａ，Ｉｎｖｏｋｅ！！〉

「手を――――」

黒色のエネルギーを纏わせた白銀の刃を、

「――出すなあああああああっっ！！！！！」

『グガアッッ！？！』

一閃。

――ザグゥッッ！！！！

『ググゥアアアアアア！！！！！』

両の手に持った刀の刃が、今正に村咲さんに肉薄しようとした妖魔の胴体を、真っ二つに切り裂いた。

斬られた妖魔は断末魔と共に爆散、跡形も無くなった。

・・・・・・どうやら人の身体と精神に寄生するタイプではなかったようだ。

「村咲さん大丈夫か！？」

「あ・・・・・・はひ、大丈夫です・・・あれ？」

切っ先を払って刀を鞘へと収め、村咲さんの傍へ駆け寄る。

ふらふらとよろけながら立ち上がろうとする村咲さんだが、膝が笑っているようだ。

足に怪我は負っていないが、緊張の糸が切れたのだろう、仕方が無い。

「はぁ・・・・・・んしょっと」

「へっふえっ!?」

これで良く、今まで壮吉爺ちゃんの手伝いが出来てたな。

心の中で溜息を付きつつ、村咲さんの華奢な身体を横から抱き抱える。

壮吉爺ちゃん曰く『お姫様抱っこ』と言う抱え方だそうだ。

「えっあのっ田上さん！？」

「家ん所まで運ぶからジタバタしないでくれ、あとコイツも返さないと・・・」

村咲さんを抱えたまま、石畳にそっと置いた刀に目をやる。

月明かりに照らされ、漆塗りの鞘が鈍い光を放つ。

思わず持ってきて、あまつさえこれを使って妖魔を斬っちまったけど・・・今回は

コイツに助けられた・・・ような気がする。

――カタカタ。

「・・・ん？」

村咲さんを抱え、いざ村咲さん宅目指して足を進めようすると、

石畳の上の日本刀が不自然に震えだす。

地震でガタガタ・・・・・・という訳でない。

あくまで独りでに、だ。

『・・・・・・ようやっと・・・・・・・戻ってこれた・・・・』

「・・・・・・は？」

「うえええええ！！？」

日本刀が勝手に宙に浮き、声を発した。

遥か遠くから、頭の中に響くような声。

――凛とした、女性の声の様にも聞こえた。

『また・・・・・・共に・・・・・・・』

〜To be continue〜

†2† 『春のうららと月夜の銀光』（後書き）

どうも、この小説を書いてます、黒衣と言います。
突然ですが、この小説を読んでいる方にちょっとしたお願い・・・的な事を一つ。

・・・・・・メインキャラ及び小説中のサブキャラの案を募集します！！
主人公は自分で決めたんですが、メインのヒロインをもう少し欲しいんです！！
あと、笑いなんかを取れるサブキャラも！！
『こんなキャラ出してください！！』とか『こんなキャラが足りねぇ！！』とか、そういう人達大歓迎です！！

キャラの募集は感想でもメッセージでも受けますので、是非お願いします。

†3† 『刻印刀・鬼灯』←執筆中

「・・・・・・ふぅ」

あの神社での戦いから一夜が明けた、翌日の朝。

ぬくぬくと暖かな布団の誘惑から逃れ、ベッドから体を起こして一息。

学校へ行くために制服へ着替え、腕時計――戦闘用ディバイザーを着けようと

手を伸ばすが、その手を止めてしまった。

「・・・大丈夫、だよな・・・？」

疑いの眼差しを腕時計（ディバイザー）にたっぷり１０秒くれてやり、漸く左手首に装着する。

取り扱いマニュアルを見ながら色々と機能を弄ってみて、やっと大丈夫だと確認でき、

ほっと一安心――――。

〈――何をビクついている主？〉

「おわあっ！？」

――――出来なかった。

いきなり腕時計が喋り、数十センチ程飛び上がってしまった。

・・・そして、どうやら今日からは俺の思い描く『平穏な日常』を

送れそうに無いようだ。

そう、俺が今朝から腕時計(ディバイザー)を着けるのを躊躇していた理由はこれだ。

――村咲さん家の神社に奉納されていた刀が、俺のディバイザーと同化してしまった。

――オマケに、武器であるはずの刀が『言葉』を喋った。

・・・登校時間まで余裕があるので、意を決して話しかけてみる事にした。

「・・・普通、腕時計が喋ったら驚くモンだぞ」

〈そういうもの・・・なのか？〉

「そういうモンなんだよ、現代(いま)はな」

〈ふむ・・・・・・なら仕方ない〉

どうやら順応性は高いようだ。いきなり喋りだす点を除けば、だが。
ふと壁の時計に目を移すと、時間はまだ6時半を回った所だった。
とりあえず朝食を済ませ、この正体不明の謎の刀『鬼灯』と会話を試みることにした。

「とりあえず・・・お前の名前は『鬼灯』《ほおずき》で間違いないか？」

〈ほぉ、覚えていてくれたか〉

「昨日あんな事があって、騒ぎの発端である張本人（？）の名前を忘れられるかっての」

上から目線な上にマイペース、って感じか。

・・・・・仕事の上司には絶対したくない性格だな。

「・・・とりあえず、俺のディバイザーの格納スペースから出てく

れ」

〈嫌じゃ〉

即答だった。　キッパリと、スッパリと、拒否された。

流石に引き下がる訳にもいかない、なので。

「えーっと・・・・・・これをこうすれば『召喚』だったな」

〈ごっごごご主人っ!!?　まさか無理矢理っ!!?〉

「ここを・・・・・・こうだっ」

腕時計型のディバイザーには、幾つもの摘みやらボタンやらが色々付いている。

その中には、ディバイザーに挿入されているカードの中に収納されている物品を、

ワンプッシュで外に出す事が出来る機能がある。

ＣＭで流れていた、壮年の男性用の白髪染めのようだ。

てな訳で、いざポチっと。

〈いやあああああああっ！！〉

説得が効かないなら、ディバイザーの持ち主たる俺がそこから追い出せばそれで良し。

程なくしてディバイザーの表面に小さな光の渦の様なモノが現れ、そこから柄頭を上にして、漆塗りの鞘に収まった見事な日本刀が競り上がってくる。

ここでは非常に危ないで一旦庭先に出てから、刀を抜き放つ。

刀身と鞘が擦れる音と共に、『鬼灯』の反り返った刃が剥き出しになる。

青く晴れ渡った空に浮かぶ太陽の光を受け、刀身が眩い銀の光を放つ。

〈こっこんな所で身包みを剥ぐなあああっっ〉

「鞘から抜かれた位で何言ってやがる」

変な声を俺の頭の中に響かせてくるが、関係ない。

柄を両手で持ち、上段に構える。

斬るのは・・・・・・あの近所の庭からはみ出してる木の枝でいいか。

「っセイッッ!!!」

ザシュッっと音を立て、硬そうに見えた枝がいとも簡単に斬れ、地面に落ちる。

ウン十年ウン百年と、あの境内の古い建物の中に保管されていたとは思えない。

保存状態が良かったのか、はたまたこの刀が世に言う『妖刀』の類なのか。

『暁の会』の大元の研究所で調べる価値大いにアリ、だな。

〈さっ鞘に収めるなら刃を払ってから・・・〉

「あ～はいはい」

小慣れた動作で右へ左と刀を振り、カチリと音を立てて鞘へ収める。

・・・両手で扱うならまだしも、左腕にディバイザーがあるから右手一本で

扱えるように鍛えないとな、うん。

〈・・・ご主人、随分と刀の振りが様になっていたな〉

「気のせいだろ、刀持つのなんて初めてだ」

カチャカチャと鍔を鳴らす鬼灯をリビングのソファに寝かせながら答える。

――実の所、一般常識と一緒に、素手以外での戦い方も学ばされたのだ。

俺は素手で殴ったり足で蹴ったりする方が良かったのだが、爺ちゃんが、

「武器を使った戦い方も学んでおきなさい」と、頑として譲ってはくれなかった。

・・・まぁ、確かに昨日はコイツ(鬼灯)のお陰で村咲さんを無事に助けられたから、

学んでおいて良かったと思っている。

でも、だからって銃器とか『ガン・カタ』まで教えられる羽目になるとは

思いもよらなかったんだけど、飛び道具なんて性に合わないんだけど・・・・・・。

・・・・・・あ、早く朝ご飯(エナジーメイト)食って学校行かないと。

〈・・・ってご主人、何故部屋の隅に隠すように私を置くのだ？〉

「隠しておきたいから隅ん所に置いてんだけど」

〈何で一緒に連れていってくれない！？〉

「今の俺には――――」

「必要ないからだ」と言いかけて、そこでふと考えてみる。

・・・確かに、持ち歩いていた方が良いのかも知れない。

家に泥棒が入る、という事を考慮したわけでは毛頭ない。

単純に、放課後に研究所に寄って調べてもらうためだ。うん、そのためだ。

ただ、さっきみたいにディバイザーと一体化されているのは気味が悪い、そこで。

「そうだな・・・外に連れてってやるよ――」

〈本当か！？〉

「――ただし、これの中に入っててもらうからな」

〈？？？　これは・・・札か？〉

お喋りな刀を手で制し、懐からある物を取り出す。

――表面が漂白されたみたいに真っ白な、一枚のカード『ブランクカード』。

その名の通り中には何も入っておらず、『器』として使われる。

……カードの中へ入るように促すと、柄頭を先頭にして刀が表面に触れる。

と、触れられた部分が波打ち、見る間に刀が波へ呑まれていく。

刀全体がカードの中へ入ると同時に、まっさらだったカードにボンヤリと紋様が浮かび始める。

次第にその形が鮮明になっていき、四隅に梵字をあしらったデザインへ変わる。

話では、中に入れた物の性質や印象を表面に絵柄に反映させるらしい。

――――俺が戦闘で使っている、『黒衣伝承』の武装符。

不気味な赤目の独眼のエイと、闇色の意匠が描かれた黒いカード。

あれは一体、何を意味しているんだろうか・・・？

◇◇

「あ、おはようございます田上さん！」

「おはよう村咲さん」

大通りの交差点近く、信号機の傍で知った顔を見つけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2044q/

†CARD DIVIZER†　～RECREATED～

2011年11月15日20時22分発行